森田思軒とスウィンホー『北清戦記』

――〈紀行文とTRACE〉という問題をめぐって――

藤井　淑禎

『北清戦記』と森田思軒の中国紀行

本稿では、一八六一年に刊行されたスウィンホー『北清戦記』[1]と一八八五〔明治十八〕年に発表された森田思軒の中国紀行、という二つの中国紀行を比較することで、紀行文というものについてと、当時のアジア紀行に多く見られるいわゆるオリエンタリズム問題についてとの二つも視野に入れながら、当時の日本・日本人と中国との関係や、それを包含する欧米諸国と東アジアとの関係について、考えてみたい。

まず、この二つの中国紀行がどのようなものかを説明しておくと、『北清戦記』というのは、一八六〇年の英仏連合軍による北京侵攻と円明園焼き討ちの際、天津から北京へと侵攻したイギリス軍の通訳として天津―北京間を踏破したロバート・スウィンホー（Robert Swinhoe）によって書かれた従軍記である。

(1) 森田思軒による訳題に従う。

主な行程は香港、大連、天津、北京だが、とりわけ天津—北京間の様子や北京市内のありさまを精細に記述しており、後述するように、これらの部分が森田思軒を始めとする後続の旅人たちの注目を集めることになる。原題は“Narrative Of The North China Campaign Of 1860”といい、日本では箕作麟祥訳で『千八百六十年北支那戦争記』(2)というタイトルで、一八七四〔明治七〕年という比較的早い時期に、忠実な逐語訳で刊行されている。

いっぽう森田思軒の中国紀行というのは、のちに名翻訳家として名を成す森田思軒が弱冠二五歳で、一八八四年十二月に朝鮮で起きた甲申事変の事後処理のために清国—日本間で結ばれた天津条約の締結交渉の取材目的で『郵便報知新聞』を発行していた報知社から清国に派遣された際、天津や北京から書き送った一連の通信文と紀行文とを指す。

甲申事変というのは朝鮮で起きたクーデターのことであり、日本の援助を受けた開明派の金玉均率いる朝鮮独立党が保守派政府に対して反旗を翻し、守旧派の朝鮮要人らを殺害したものの、清国が保守派を支援して反撃に転じ、日本公使館の破壊と日本人在留民の殺害という事態を招き、日本側は金玉均らをともなって退却する結果となった一連の事件を指す。

こうした事態を受けて日本は、朝鮮に対しては井上馨を派遣して漢城条約を結び〔一八八五・一・九調印〕、清国に対しては伊藤博文を派遣して天津条約〔四・十八調印〕を結ぶことになるのだが、森田思軒が取材目的で派遣されたのが、この天津条約締結交渉だったのである。

(2)本稿では『北清戦記』の引用は原文の英文ではなく、「忠実な逐語訳」である箕作麟祥訳を用いる。なお、思軒自身が訳して引用した部分を問題にする時は、思軒訳を用いる。

森田思軒と『郵便報知新聞』

本題に入る前に、ここで、森田思軒のことも簡単に紹介しておこう。一八六一〔文久元〕年、備中笠岡に生まれ、矢野龍渓のもとで大阪、徳島、三田の慶應義塾に学ぶ〔一八七四―七七〕。のちに翻訳王と呼ばれた英語力はこの時期の研鑽の賜物である。清国訪問時においても、コミュニケーションは、英語の堪能な中国人通訳を介してか、さもなくば漢字による素朴な筆談〔ただし、稀〕だったので、この慶應義塾在学の意味は大きい。慶應義塾退学後、一時郷里に帰り、漢学教育で有名な興譲館に学ぶ〔一八七九―八二〕。ここで漢詩・漢文の運用能力を身につけ、のちの翻訳におけるいわゆる周密文体は、この時期の研鑽に多くを負っている。一八八二〔明治十五〕年、龍渓の引きで立憲改進党系の『郵便報知新聞』を発行する報知社に入社。ここから、一八八五年の清国派遣まではひとまたぎ、である。

甲申事変の事後処理がらみで清国に派遣されたのはもちろん思軒ばかりではない。報知社だけを見ても、この時期、著明なジャーナリストたちが次々と朝鮮や清国の各地に派遣された。朝鮮には、十二月二二日に出発した井上馨特派全権大使一行を追うようにして、犬養毅が二五日に朝鮮仁川港に向けて出発した。他方、清国へは、これも同様に二月二八日に発った伊藤博文遣清大使一行を追うかたちで、三月二日に尾崎行隆が、そして九日にはいよいよ森田文蔵〔思軒〕が、いずれも上海に向けて出発した。

一種の報道熱、派遣熱が指摘できるわけだが、この時期、国際郵便網、電信網の整備にも後押しされて、「報道」は日進月歩の発展を続けていた。すでに国内の整備は一段落していたから、特に海外のニュースの場合が刷新著しかったわけだが、たとえば尾崎行隆と森田思軒の派遣を告知した文章では、その意気込みがこんなふうに表明されている。

本社従来、英米独安南朝鮮上海等、各々通信員を配置し、海外報道を掌らせ置きたるが、今度遣清大使既に北京に向はれ、且つ仏軍は新戦略を取り東洋多事の際に付[3]、更に一昨日横浜発の名古屋丸を以て先づ尾崎行隆を上海に特派し、来る九日広島丸を以て森田文蔵を北京に特派せんとす。在清の旧通信員に加るに此両特派員あり。本社の報道庶幾は益々精敏に赴き看客諸君の望に副ふを信ず。〔『郵便報知新聞』一八八五・三・四〕

イギリス、アメリカ、ドイツ、ベトナム、そして朝鮮、中国での通信網を誇示すると同時に、読者の期待に応えられるよう、報道のいっそうの充実を約束しているが、こうしたことを可能にしていたのが郵便網・電信網の拡充・整備であったわけで、一例をあげると、清国の場合、長崎から上海までつながっていた電信線が天津まで延びるのが一八八一年のことであり、天津から、北京に近い中規模都市の通州まで通じるのが一八八三年、そして最終的にそれが北京にまでつながったのは一八八四年だった〔黒田清隆『漫遊見聞録』一八八八〕。

(3) この時期、フランスはベトナムの支配権を清国と争っていた〔清仏戦争〕。その結果、ベトナムはフランス保護領となった。

伊藤博文一行や思軒が北京に足を踏み入れ、状況を刻々本国に通知してきたのがその翌年の一八八五年なのだから、それらはまさに最新の設備を駆使しての報告であり、報道であったことになる。

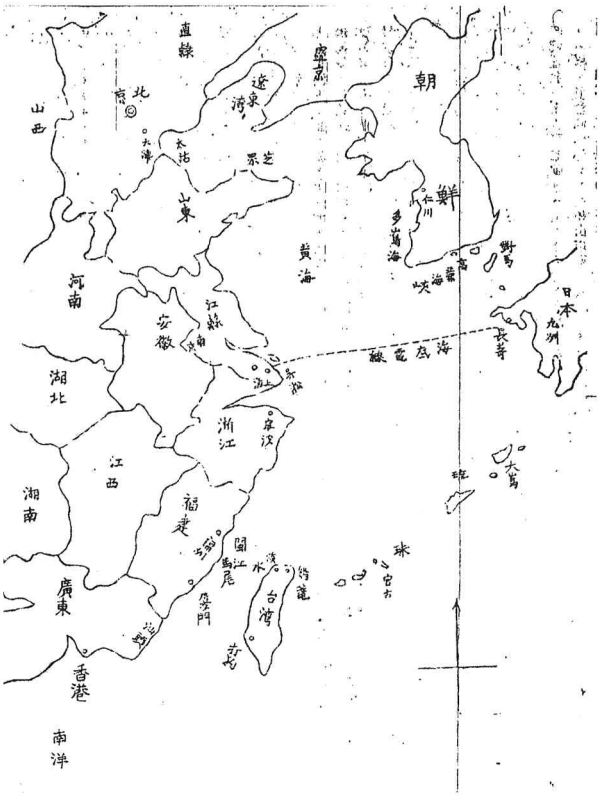
伊藤博文の条約交渉

天津条約の調印は四月十八日だが、思軒の訪中は伊藤博文一行の後を追いながら天津条約締結に至るまでを報道するのが目的だったのだから、まずは伊藤らの足取りを簡単に確かめておこう。

一八八五年二月二八日に横浜から快速の臨時御用船薩摩丸で出発した伊藤一行は、途中長崎に立ち寄り、航路の様子を問い合わせたうえで、三月九日には渤海の入口に当たる芝罘（チーフー）に達したものの、天津への水路となっている白河の河口近くの太沽（タークー）を通って天津に辿り着いたのは大幅に遅れて十四日だった。

思軒は三月十八日付けの上海からの通信で〔『郵便報知新聞』三・二七〕、船中で天然痘が発生したためと報じているが、無署名の「漢城の事変、天津の条約」〔『郵便報知新聞』五・十六―二〇〕によれば、白河の河口から五「英里」(4)のところにある浅瀬が、三月中旬の強い北西の風に押されていっそう浅くなっていたために芝罘に三日も留まらざるをえなかったようだ。そして風がおさまったのを見て芝罘を出航〔それも随行してきた小船の駿河丸に乗り換え、積み荷も降ろして身軽になったうえで〕、白河河口から浅瀬を通過して太沽に達し〔十四日早暁〕、その日の午後には天津に到着している。

(4) マイルのこと。一マイルは約一・六キロメートル。



（『郵便報知新聞』一八八四・八・二七より）

天津には直隷省総督で交渉相手の李鴻章がおり、そのため交渉場所が天津か北京かで報道陣をとまどわせることになったが、結局、一行はいったん北京まで出向いて国書を届け、ふたたび天津に戻って李鴻章と交渉することになった。三月十七日に天津を出発、北京への到着は二一日であり、その北京を三月三一

日に出発して天津に戻ってきたのは四月二日だった。その後、本格的に交渉が始まり、天津条約の締結は既述のように四月十八日。一行は翌日には天津を離れ、日本へ直行し、横浜への帰着は四月二八日という、駆け足の日程だった。

森田思軒と天津・北京

三月九日に横浜を出発した思軒も、基本的にはこの伊藤らの一行を追いかけるようにして動いている。二月二八日に快速の臨時御用船で横浜を出発して天津に向かった伊藤大使一行を追って横浜を発ったものの、民間航路には天津直行便はなかったので、いったん上海に行き、そこから天津行きの船に乗り換えなくてはならなかった。

横浜を発ち、長崎を経て三月十六日に上海に到着。しかし、すぐには天津への船がとれず、十八日になって上海を発ち、二三日に天津着。翌日には伊藤ら一行を追いかけて慌ただしく北京に向かっている。三月四日付けの『郵便報知新聞』紙上の社告によれば、当初、社では大使一行が通例通り上海経由で天津に向かうと見ており、あまりに思軒の到着が遅くなるようであれば、上海に先着していた尾崎行隆に大使一行を追わせるつもりであったようだが、結局そうはならず、一行からは一週間ほど遅れての思軒の北京への出発となった。情報が錯綜していて確かなことは言えないが、あるいは、本格的な交渉はいずれ天津に戻ってから、しかも伊藤一行の北京滞在はそれほど短期間ではなさそうだ、との感触をつかんだのかもしれない。事実、一行の北京滞在期間中に、思軒は

何とか追いつくかたちで北京に辿り着いているのである。

思軒の旅程のその後を紹介しておくと、三月二四日に天津を発ち、北京着は二六日。そして三一日まで北京に留まり、伊藤一行からは一日遅れの四月一日に北京を発ち、おそらく三日に天津着。そして天津条約締結に至るまでの交渉過程を逐一レポートし、遅くとも四月十九日までには上海に帰着している。当初、社では四月十六、十七、十八日付けで天津から届いた電信の発信者を思軒とみなしていたが、十九日午後六時二四分付けで思軒が次のような電報を上海から寄越したことで、それが早とちりであったことを知ることになる。

本日十九日午後六時二十四分在上海森田文蔵発
天津ニハ別ニ通信員ヲ置キ小生ハ只今当地（上海）へ帰着ス。条約書ニハ昨日（十八日）調印。伊藤大使ハ今日（十九日）帰朝ノ途ニ上ル筈。〔『郵便報知新聞』四・二一〕

上海からの思軒の電文を紹介したうえで、「談判結了大使帰朝」と小見出しのあるその記事は、続けて次のように述べている。

右の電報に因て見れば本社の特派通信員〔思軒のこと—藤井注〕は談判愈々平和に帰し調印の日取りさへ定りたるを確かに聞き込みし後ち、速に帰朝して委細の事情を読者に報道せんが為め、直ちに天津を発して帰途に

就きしなるべし。其後天津より到着せる電報は悉く別に頼み置ける通信員の発したるものと思はる。〔中略〕兎に角既に上海まで帰着せる上は便船次第に帰朝す可ければ実地目撃親睹せる委細の情形を記して読者に報ずることを得るは既に近きに在らん。読者請ふ之を諒せよ。

事実、編集子が予告したように思軒のその後の動きはすばやく、四月二五日には長崎に到着し、三十日には「帰社の詞」〔『郵便報知新聞』五・一〕を寄せている。そしていよいよ、それを引き継ぐかたちで、訪中時の覚え書きをもとに、「実地目撃親睹せる委細の情形を記し」た「訪事日録」なる紀行の連載が開始されることになるのである〔「訪事日録」の一と二は既発表。三と四が五月二日から六月七日まで〕。

ここで、以上の思軒の足跡を簡単に表にしておこう。

一八八五・三・九、新橋・横浜発。
三・十三、長崎着。
三・十六、上海着。
三・十八、上海発。
三・二三、天津着。
三・二四、天津発。陸路で北京に向かう。楊村泊。
三・二五、河西務(ホーシーウ)[5]と馬頭(マトー)を経由して、浄舎湾(チャンチャワン)泊。
三・二六、于家圍(ウユーチャウユー)で昼食ののち、北京に入る。

(5) このあたりの地名のカタカナ表記は、思軒文のルビによる。

三・二七—三・三一、北京周遊。円明園、万寿山等をめぐる。
四・一、北京発。帰途は北京に隣接する都市である通州から舟で天津に向かう。
四・三、天津着。
四・十六、天津発。
四・十九、上海。
四・二五、長崎着。
四・三十、東京。

森田思軒とスウィンホー

東京を出発してから帰京するまでの日数で言えば、三月九日から四月三十日までの五十日余りの旅、ということになるが、その旅での見聞に基づいて森田思軒が『郵便報知新聞』紙上に発表した紀行文・通信文は、三月二十日掲載の「訪事日録一」を皮切りに、天津通信、北京通信などと題された通信文をあいだにはさんで帰国後も連載が続けられ、六月七日掲載の「訪事日録四」の最終回まで、合計で三十回前後にも及んでいる。

その中でも重要なのは、三月二四日から二六日にかけての天津から北京までの旅の記録である「訪事日録三」〔五月二日から十二日にかけて掲載〕と、三月二七日から三一日までの北京遊覧の記録で、「北京紀行」という副題のある「訪事日録四」〔五月十五日から六月七日にかけて掲載〕だが、その「訪事日録

三」のほうの五回目〔五月八日掲載〕に、初めてスウィンホー『北清戦記』への言及が見られるのである。

既述のように森田思軒は天津から北京へは、楊村という宿場で一泊、翌日、河西務と馬頭を経て、浄舎湾で一泊、そしてその次の日に、北京近郊の于家圍を経て北京に入城しているが、河西務の宿場に到着した際に、一八六〇年の戦争〔英仏連合軍によるいわゆる第二次侵攻〕に思いを馳せ、『北清戦記』に言及しているのだ。

二十五日（続）

午前十一時の比河西務の駅に到る〔中略〕当時英軍の本営ハ乃ち此駅にあり余嘗て当時従軍通事官たりしスウキンホー氏著ハす所北清戦記を読むを愛し耳、河西務、馬頭、浄舎湾、于家圍、等の名に親むもの一日にあらず今ま現に来て其地を踏むに及び安んぞ戚々焉俯仰感慨の念を生ぜざるを得ん

森田思軒の文章はこのような漢文訓読調の文語体だが、中略部分も補って今ふうに言い直すと、次のようになる。――イギリス公使パークスらが敵将・僧格林沁〔サンゴリンチン〕の軍の姦計に陥って捕らえられたことに激怒した連合軍が北京に進攻する際、イギリス軍の本営が置かれたのが、この河西務の宿場であり、自分〔森田思軒〕は以前から『北清戦記』を愛読していて、そこに

出てくる河西務、馬頭、浄舎湾、于家園といった場所にことのほか愛着を持っていた。そしていま現実にその場所に立つことができて、どうして感慨の念を抑えることができようか、となる。

続けて森田思軒は、『北清戦記』中の、河西務の地勢や風景を記述し、さらには山に登ったり河岸を散策したり、「清潔愛ス可シ」の川で遊泳したりする様子を描写した原文をみずから訳して引用したうえで〔箕作麟祥訳とは異なるので、原書を見ていたとわかる〕、それと目の前の風景とを比較して、このように述べている。

> 余の瞥見せる所にては河水も一向清潔とハ見えず山抔云へる者ハ影も形もあらさりし〔中略〕スウヰンホー氏の所謂山とは恐く余輩が折々途中にて見たる低き小邱の類を指せるにはあらずや

「島国万山の中」で育った自分のような人間は「行け共々々四面莫焉として些少の凸隆をも見ざるは奇異の想をなし」、そんな自分の目から見れば、スウィンホーの言う「山」などはとても山と呼べるようなものではなく、せいぜい「低き小邱の類」でしかない、というわけだが、このように、『北清戦記』に導かれて作中で描かれたさまざまなモノやコトに注目し、それらを自分なりに吟味し直していくのである。

スウィンホー氏の名文

次に『北清戦記』が紹介されるのは、その日の宿泊地である浄舎湾に夕方になって着いた時の記述中である〔「訪事日録三」五月十日掲載〕。『北清戦記』の中で浄舎湾は、部分的に崩落しつつある古い墻壁に囲まれてはいるものの、いったん郭門をくぐると広い道路の両側には店が軒を並べる街〔ただし住民は避難していて無人―藤井注〕として紹介されている。森田思軒はその部分をやはり原文を訳して引用した後で、この近くで激戦が闘われたことを想起して、『北清戦記』中のその戦闘部分を「スウキンホー氏の名文」として「余平素喜で之を誦す」と絶賛している。

思軒が引用したのは、「此ニ於テ、ドラグン隊〔英国軍中の精鋭部隊―藤井注〕ハ、直チニ進デ韃靼兵〔清国軍中の精鋭部隊―藤井注〕ヲ襲撃シ」〔箕作麟祥訳〕に続く、以下の部分である。

馳突博撃互ニ死力ヲ竭クシ暫クノ間ハ両軍馬蹄ノ下ニ風起スル砂塵ノ為メ両軍交戦ノ状ヲ見ルコト能ハズ纔カニ唯ダ兵士相撃ツ所ノ劒光ト騎兵ノ短銃ヲ放ツ灰色ノ煙トヲ時々望見スルニ過ギザリシ幾モナク浮塵滾沙一時ニ消散シ豪邁勇壮ナル「ドラゴーン」隊ノ恰モ練兵場ニアルガ如ク整列シ馬ヲ立テシヲ見タリ

この部分も箕作麟祥訳とは少し違いがあるので思軒の独自訳とわかるが、『北清戦記』中のモノやコトに魅かれ、それらを尋ねあてて吟味し直すだけでなく、その「名文」ぶり〔もちろん英文としての〕にも思軒は強く惹かれていたのである。

思軒が『北清戦記』に言及した例をもう一つだけあげておくと、英仏連合軍による略奪の被害を受けた円明園を思軒は北京到着後の三月三〇日に訪れているが、城内から安定門を通って郊外の円明園へと向かう際、この安定門に陣取った連合軍の北京城への砲撃が寸前で回避された逸話が思い出されるとして、またしても『北清戦記』を引用している〔「訪事日録四」五月二一日掲載〕。

「既にして安定門を過ぐ門は北京外郭の北東にありて此を出れバ即ち郊也余〔思軒—藤井注〕が此を過るの際忽ち胸に浮かびしハ去千八百六十年十月十二日の事なり」と切り出した思軒は、急ごしらえの砲台に据えられた巨砲で城壁に穴をあけ、その穴から兵を進める作戦が「愈よ十二日の正午こそ全軍総かかり」で敢行されようとするあたりの叙述を指して「スウヰンホー氏之を叙する甚だ巧みなり」として、以下の部分を引用している。

既ニシテ諸砲隊悉ク皆ナ戦備ヲ成シ「ドラゴン」騎兵ハ特ニ洞孔ヲ穿ツベキ巨砲ニ傍フテ整列ス〔中略〕已ニ数エテ十一時五十五分ニ至リ今マ五分ヲ出デズシテ正午ナラントス全軍寂トシテ声無ク〔中略〕放発ノ号令将ニ我勇将軍ノ唇辺ヲ転出セントスル時佐官ステヘンソン馬ヲ馳セ来リ告テ

曰フ守兵既ニ降レリト

紀行文とTRACE

このように、『北清戦記』をかねてから愛読し、そこに登場する場所や地名に惹きつけられていた森田思軒と紀行文としての『北清戦記』との関わり方を見ても、基本的に紀行文はTRACE〔踏襲〕されるものだということがよくわかる。河西務にしても、浄舎湾にしても、さらには安定門にしても、先行する紀行文である『北清戦記』において印象的に描かれていたからこそ、後続の旅人である思軒も同じ対象に注目して、今との違いを見出したり、その巧みな表現を称えたりしているのである。

TRACEといえば、そもそも『北清戦記』自体が、北京滞在時の記述においては、クビライ・カーン統治下の北京を訪れたマルコ・ポーロの『東方見聞録』〔一二九八年成立〕[6]をTRACEしていたことを見落とすわけにはいかない。一例をあげれば、マルコ・ポーロの記述に導かれて、「紅青緑色」に見事に塗られた宮殿の屋根瓦や、「風色愛ス可キノ湖水」、大理石の「大門」などに同じように注目しており、TRACE以外の何物でもない。ただし、その反応は、「実ニ一毫ノ虚誕ナキ」という評価もあれば、逆に上記の三例のように、今はすっかり変わり果ててしまい、というものもあるが。

TRACEは、このように紀行文というものについてまわるものであり、大げさに言えば、紀行文の本質とも宿命ともみなすことができるものなのかもしれ

(6)『東方見聞録』は、月村辰雄・久保田勝一訳の岩波書店版〔二〇一二年〕を参照した。

ない。先行する紀行文の著者が訪れたり、見たり、表現したりしたものを、後続の紀行文の著者もまた訪れ、見ようとし、そして表現しようとする。先後する紀行文同士の間には、そうした反復的で重層的な関係が見て取れるのである。有名な、「歌枕」だとか「名所旧跡」などといったものも、そうした紀行文の本質に根ざすものだと見ることができるし、表現面で言えば、同種の対象に対して同種の表現を反復した結果が結晶化した美辞麗句などは、文字通り、TRACEの産物ということができる。その意味では、いわゆる「名所旧跡」なども単にTRACEが積み重ねられた結果に過ぎないのかもしれず、さらには、場所や風景だけでなく感慨もTRACEされるとしたら、代々の紀行文の著者たちが異口同音に感嘆の声を発している、などということも意外に当てにならないものなのかもしれないのである。

オリエンタリズム問題

ここで、少し観点を変えて、いわゆるオリエンタリズム問題にも触れておこう。周知のように、当時の中国紀行には侮蔑的な評語が多く見られる。森田思軒の紀行に例をとれば、宿屋や町の不潔さを嘆いたり、兵士たちの軍紀の乱れや規律の無さにあきれたり、同船した中国人父子の金品に執着するさまを苦々しく思い、円明園の遺物すら売り物にしてしまう商人の金もうけ主義を軽蔑したり、さらには運河が狭くて不便な点や大八車の劣悪な乗り心地を改善もせずに放置しておく怠慢ぶりを批判したり、といったような具合である。

ところが、これを『北清戦記』と比べてみると、それらの多くが『北清戦記』にも見られる指摘であることがわかる。さらに言えば、当時のアジア紀行にも広く見られるものでもあったのだ。森田思軒の紀行と『北清戦記』とが重なりあう例を一つだけあげれば、馬車の車輪にバネさえ付ければ乗り心地は改善されるのになぜそれを放置しておくのか、という中国人の怠慢ぶりへの批判がある。そしてこの批判は、私が読んだそれほど多くもない中国紀行のなかに、他にもいくつか見いだされる指摘なのである。

このことと、先に指摘したTRACEという紀行文の特質とを掛け合わせると、いわゆるオリエンタリズム的見方もTRACEの産物だったのではないか、と思えてくる。TRACEされる感想であり、TRACEされる中国観、の可能性がふくらんでくるのである。

二つの紀行のちがい

いずれにしても、『北清戦記』も森田思軒の紀行も、大雑把に括ってしまえば、オリエンタリズム的見方に汚染されていた、ということになるのだろうが、テキストそのものを対象として、それを精読することから出発しようとする立場からすれば、そんな雑駁な結論にとどまっているわけにはいかない。それらの紀行の個別の特徴を探りだし、それぞれの微妙な違いにこそ注目していかなくてはならないのである。その違いを生み出すのは、書かれた時代であったり、書いた著者の個性であったり、著者の国や置かれた立場であったりと、さまざ

まだろうが、そうした精読者の眼でテキストとしての森田思軒の紀行と『北清戦記』とを読み比べてみると、どのようなことが見えてくるだろうか。

ここからは二つの紀行の違い、すなわち『北清戦記』にあって森田思軒の紀行にはないもの、そして森田思軒の紀行にあって『北清戦記』にはないもの、に注目して考えていくことにする。

『北清戦記』にあって森田思軒の紀行にないのは、中国人や中国の自然に対する親和的な態度である。少しだけ例をあげると、太沽から天津に向けての途次に、敵兵がすでに撤収した、「銃窓アル墻壁」に囲まれた村があり、そこでスウィンホー一行は村人たちから「晩餐」用に「夥多ノ品物」を提供され、「皆頗フル愉快ノ情ヲ覚エ」た〔原文は“they soon supplied us with enough provisions for a supper, and we made ourselves very jolly”〕。しかし、結局この夜は本隊に呼び戻され、それを飽き足らず思ったスウィンホーらは、翌日の業務を終えると再びこの村にやってきて、そこで一夜を明かした。村の中央に「二層ノ仏塔」があり、そこを宿舎としたのである。そしてその夜、スウィンホーらは仏塔の周囲の、樹木が生い茂り、野鳥が飛び交う光景に心を洗われることになる〔第七回〕。

八月三一日の部分では、やはり太沽から天津に向けての道沿いの村で、運よく「花園」や「園中至美ノ地」〔原文は“the best of orchards”〕に野営できた者たちが、「菓樹ノ微風ニ動揺スルヲ望ミ」、「園中花卉ノ間ニ逍遥シ」、「真ニ軍中ノ一適楽」〔原文は“it was no small pleasure to”〕を愉しむ様子が描かれてい

る。天津から先の部分では、前述の思軒が感動した河西務での水浴場面などもあり、そのあたりの光景は「此地ハ首ヲ回ラスニ、処トシテ黍稷ノ繁生セサルナク、林木蔭茂シ、周辺ノ景色甚ダ美ナリ」〔原文は“the country was very beautiful”〕〔第九回〕といったような、やはりすこぶる親和的なものだったのである。

もちろん、思軒がここを踏破したのは三月で、他方スウィンホーらは八月であったという違いも無視はできないが、それにしても思軒の中国紀行には自然へのまなざしがあまりにも少な過ぎる。これと比べると極端なくらい対照的に、『北清戦記』にはその種の描写が横溢している。そうした自然への親和的なまなざしは『北清戦記』の一大特徴であって、見てきたように、「美麗なる一小花園」といった類の表現は至る所に見られるし、鳥獣の多いこのあたりは猟師や博物学者にとっては「無限の楽土」であるといったような最上級の評語すら見られるのだ。

このような中国の自然と人間に対する親和的な姿勢を見ると、『北清戦記』をオリエンタリズムという一言で片づけてしまうことがいかに乱暴であるかを痛感させられる。もちろん、こうした親和的な姿勢すらもオリエンタリズムの裾野を形成するものであるとの見方があることは承知しているが、それにしても、侮蔑と親和の違いはそんなに簡単に無視できるものではないはずである。

危機的な東アジア情勢

ここで再び思軒の場合を想起すると、森田思軒の紀行にはこうした親和的な姿勢はほとんど見られないことは先に確認した通りである。それでは、その代わりに、森田思軒の紀行にあって『北清戦記』にないものとは何だったのか。それは、言うまでもなく、朝鮮・中国・日本という東アジア三国の将来に関する、危機感に貫かれた考察である。時代も、そしてそもそも国も立場もまったく異なるスウィンホーの『北清戦記』にこれがないのは当然かもしれないが、当時の日本人にとってきわめて切実なこの問題への危機意識が、森田思軒の紀行から『北清戦記』にあったような人間や自然への親和的な姿勢を奪ってしまったのだと言うこともできるかもしれない。

清国特派中、片時も思軒の頭から離れなかったのが、清国と欧米列強との関係だった。数日間しかなかった北京滞在中に、わざわざ、当時は廃墟でしかなかった円明園を訪ねたのは、二五年前の英仏連合軍による焼き討ちが念頭にあったからであった。前述のごとく、円明園をめざしたその日、安定門を過ぎて北京の城外に足を踏み出した途端、「忽ち胸に浮ひしは去千八百六十年十月十二日の事なり」〔「訪事日録四」〕と思軒は記している。

もちろん、そうした関心が単なる歴史への関心や、ましてや一種の野次馬根性からであったはずはない。同じ東アジアの一員としての清国の不幸な歴史を鑑とし、また他山の石としようとする、この時期の明治人に広く共有されてい

た愛国心ゆえの関心、ととるべきだろう。当時の明治人にとって、英仏軍による円明園焼き打ちは、英―清間のアヘン戦争〔一八四〇―四二〕、英仏―清間のアロー戦争〔一八五六～六〇〕とひとつながりの事件であった。いずれも欧州列強が清国に難癖をつけて開国・交易・雑居や賠償などを要求する、という理不尽なものであったからである。

そうした欧州列強の脅威は、思軒が新聞界に身を投じた頃にも、決して解消されてはいなかった。むしろ、加害者側にはロシア、プロイセン〔プロシア〕までもが加わり、逆に被害者候補としては、朝鮮、ベトナム、さらには日本までもを加えて、東アジア情勢はいっそう緊迫した様相を呈していた。そんななかでの難問は、日本だけが単独で独立を守ればいい、ではすまされなかったという点であった。ベトナムはひとまずおくとしても、あくまでも日本・清国・朝鮮が連携して欧州列強に立ち向かう必要があり、どこか一角でも崩れれば、連鎖的な崩壊が始まるとの危機感が言論界をおおっていたのである。

ここで思軒自身の言説も見てみると、「天津通信」〔四月十日、掲載は四月二九日〕では、イギリスとロシアが「朝鮮南端の一小島なるポート、ハミルトン」を寄港地として狙っているとのニュースに接して、ここを欧米列強に押さえられては東アジア三国にとって大問題であると警鐘を鳴らしている。「ポート、ハミルトン」とは朝鮮・全羅南道の高興半島の南にある三つの島のことで、現在では巨文島と呼ばれているが、思軒は当時の地図の記載に従って「雲龍島」と呼んでいる。

イギリスとロシアの雲龍島争いは、「我邦の利害」にも大いに関係し、それというのも「雲龍島の地たる日本海の襟喉に当りて南西は黄東二海を控し一旦警あるの日艦隊の本拠を此に置き左右羅張せば以て日本海を鎖して東海を扼すを得可し」というような要地であったからである。もしイギリスとロシアのどちらかがここを占拠するようなことがあれば、「其我邦の安危に関する果して如何ぞや譬へば我家の門前に睡虎を処くが如く其霍然として躍起一吼するに及ばば我が出入の途は爰に塞がりて唯だ手を収め脚を縮め彼れの為すに任かす外復た奈何ともする能はざらんとす」というような事態となるのは必至だった。

ちょうど家の門の前に虎が居座るようなもので、通行や出入りが不自由となる点で東アジア三国の命運をも左右しかねない、というわけである。しかもそのことは、「唯だ我が邦を然りとするのみならず清と云ひ韓と云ひ亦た皆な斯の命運を脱がるるを得ざるべし」というように、日中韓の三国に共通する懸案でもあったのである。イギリスとロシアが雲龍島を虎視眈々と狙っているという「此風聞は余が游清以来尤も利害に感じたる緊報にして」と思軒が危機感を露わにしたのも、無理からぬことであった。

日中韓の連携

こうした列強の脅威を前にして、問題となるのは、日中韓の三国の連携関係のあり方であった。特に力関係では上にある清国と日本の態度如何が問われていた。これに関連して思軒は、「仏清調和ノ擬策ヲ読ム」〔『郵便報知新聞』

一八八五・二・八～十二）では、ベトナムをめぐる清仏の争いを収めるべく、清国がベトナムの独立を尊重すればフランスも同様にせざるを得ず、八方円満に収まるだろうと提案している。同様のことが朝鮮に関しても言えるわけで、清国が「朝鮮ノ独立ヲ輔扶シテ近クハ露国ノ朶頤ヲ防ギ遠クハ欧州諸国ノ垂涎ヲ杜絶シ以テ鶏林八道ヲシテ無缺ノ金甌タラシムルコトヲ務メバ清廷北東ノ一管戸ハ自然泰山ノ安アルベシ」として、朝鮮の独立を尊重したうえで、連携することを説いている。さもないと、欧米列強も清国にならって朝鮮やベトナムの独立を軽んじ、侵略的態度を取ることになり、その結果「其間接ノ害ヲ東亜全面ニ蒙ラス実ニ測レザルモノアリ」ということになるからである。

力のある者こそがまず自らの姿勢を正さなくてはならないとする態度は、清国の朝鮮への干渉が「其隙ヲ外国ニ啓テ之ニ蚕食鯨呑ノ辞柄ヲ仮スニ至ルベキハ必然ノ数ニシテ朝鮮ノ外国ニ蚕食鯨呑セラルルハ未ダ嘗テ我レノ安寧ト治平トヲ危フスルノ基ニアラズンバアラズ」（「訪事日録一」三月二〇日掲載）という、日本の安全のためにも清国の朝鮮に対する態度の自重を促す注文にも歴然としている。

清国・朝鮮といかに連携して、欧米列強の進出に対抗するか、そもそも、清国に、朝鮮の独立を尊重しつつ日本と連携する意志があるのかどうか、朝鮮にしても、清国の干渉をはねのけつつ、対等な立場で日清と連携して欧米列強に対抗する用意があるのかどうか、解決すべき難問は山積していた。さらには、いち早く文明開化を達成しつつあった日本と、そこまでには達していない清

国・朝鮮、という根本的な足並みの乱れはどうすればよいのか、そうした多くの困難・難題を前にして、さまざまな模索が続けられていたのが、森田思軒訪中前後の東アジア情勢であったのである。

本稿では、スウィンホー『北清戦記』と森田思軒の中国紀行という二つの中国紀行を比較検討することで、TRACE〔踏襲〕という紀行文の特質をあぶり出し、当時のアジア紀行に多く見られるいわゆるオリエンタリズム的見方さえもがその支配下にあるのではないかと考えてみた。さらには、そもそも森田思軒が『北清戦記』を愛読したのも、〈欧米諸国と東アジア〉問題、もっと言えば危機的な東アジア情勢にどう対処すべきかを探るためであり、そうした思軒側の「特殊」事情が、最終的には二つの紀行を似て非なるものへと導いていったのではないかと結論づけた。

森田思軒の紀行から数えてもすでに一三〇年近くの時が経過したわけだが、その間、本稿でその端緒を取り上げたいわゆる東アジア問題は、不幸と悔恨の激動の時代をくぐり抜けてきた。そしてそれは今なお決着することなく、くすぶり続けている。そんな今だからこそ、東アジア問題がいまだ「不幸と悔恨の時代」に突入する以前の〔寸前の〕本稿で取り上げたような時代に立ち返り、その時代の人々の声に耳を傾ける必要もあるのでないだろうか。こんな思いを本稿の結びとしたい。

【参考文献】

藤井淑禎「森田思軒の中国紀行をたどる」『立教大学大学院日本文学論叢』第三号、二〇〇三年。
藤井淑禎「森田思軒と東アジア情勢」『東海学園　言語・文学・文化』第八号、二〇〇八年。
斎藤希史ほか校注『海外見聞集』岩波書店、二〇〇九年。